

紀念會祝歌：文苑

著者	石川，重治，柳川，眞榮，大木，俊九郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	7 5
ページ	6 0 - 6 0
発行年	1899-11-25
その他の言語のタイトル	紀念會祝歌：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5414

旅の故郷に於けるも亦斯くの如し、故郷なくんは羈旅を知らず、羈旅なくんは故郷を知らず、羈旅は大なる故郷の鏡なり、見よ今迄は更に吾人の目の中になかりし故郷も、二度旅泊に身を寄するに及んで、最も愉快なる、最も安樂なる天國の如く躍然ときて吾人の胸中に湧出ま來り、羈旅に於ける現在の苦痛は、故郷に於ける過去の快樂と相對照し來つて、萬感交も到り、吾人をして轉た暗涙にひせばまひる非ずや、羈旅は實に故郷の鏡なり羈旅なくんは故郷なく故郷なくんは羈旅なきなり（未完）

文 苑

紀念會祝歌

祝紀念會

石川 重治

龍田山千代もとよばふまつ風に問はゝやけふのためしありやと

紀念日を祝きて

柳 川 眞 榮

我も來てともにいはふかふみのやの開けそめにま今日のこの日を

紀念會を祝して

大木 俊九郎

松風の音にも千代はうたふめり十とせのむかえれもひ出つゝ

硯友會兼題

茸 狩